
one 's home town

Fumi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

o n e ・ s h o m e t o w n

【Nコード】

N 4 9 4 3 B

【作者名】

F u m i

【あらすじ】

一つ屋根の下で過ごす11人のもとへ、突然現れた少年！命の大切さ。家族のあり方そして、愛を知らない全ての人へ

プロローグ

無邪気な笑顔

傷だらけの顔

生意気な口

笑顔に隠されてる涙

ひとりぼっちだった君

忘れたくない

忘れられない

いや、僕達は忘れない

大切な弟^{あなた}がいたこと…

第1話 小さな背中

午前6時

安らかだった眠りを、邪魔するかのように目覚まし時計が鳴り響いた。

眠い目をこすり、大きくあくびをすると、顔を洗い流し一階にある食堂へ降りた。

台所から、包丁の音がした。

扉を開けると、いい匂いがする。

この匂いが好きだ。

「おはようさん。」

いつも、笑顔で挨拶してくれるのは、ここのアパートの管理人さん。

名前は、あかりさん。

優しいお母さんの人だ。

年は、最年長の30歳。

亡くなった親の後を継ぎ、このアパートを管理している。
一人で一階の管理人室に住んでいる。

「やつだあゝ。もうゝ」

朝から、手をつなぎ食堂に来たのは、201号室の【ゆう】さんと【ちか】ちゃん。

アパート1のラブラブカップルだ。

ゆうさんは、23歳。

ちかちゃんは、二十歳。

朝から晩まで、いちゃついてる、バカップルだ。

隣の部屋の俺の事も考えてほしい…

「おはよう」

「おはようございます」

続いて、降りて来たのは、【まこと】さんと【りな】さん。
年は、二人とも29歳

俺の事を、面倒みてくれてる、大人のカップルだ。

部屋は、俺の逆隣の203号室

「おはようございます！」

元気よく、駆け下りて来たのは【みき】さん。

いつも、さわやかな人だ。

そして、後ろから大きなあくびをしながら降りてきたのは、【ひろ】さん。

ごく普通の平凡なカップルだ。

年は、ともに23歳。

ゆうさんとひろさんは、幼なじみで仲がいい。

部屋は、205号室

「おはよう!」

続いて、降りて来たのは【としや】さん、【まゆ】さんのカップル。

としやさんは、みんなから【とし】って呼ばれてる。

だから、俺も、としさんって呼んでる。

としさんが27歳。

まゆさんが26歳。

こちらは、中学校から付き合い合ってる。

アパート一番、長い付き合いだ。

部屋は、206号室

最後に降りて来たのは、【たか】さん。

あかりさんと同じ、30歳。

みんなの兄貴分だ。

優しく面倒見がいい。また、料理もうまい。

申し分ない男の人だ。

しかし、なぜか彼女がいない。

噂では、前に結婚していたみたいだ。
部屋は、207号室。

そして、俺は202号室に住んでいる、【だいすけ】。
22歳。

ここは、『故郷^{ふるさと}』という名前のアパート。

ほぼ、全員がカップルで住んでいるという、暑苦しいアパートだ。
俺も一緒に住んではないが、隣町に彼女がいる。
ここに来て、半年。みんなとも、打ち解けて楽しく過ごしていた。

この日も、毎日の日課で住人全員で食事をしていた。

「そつえば、今日新しい人が入居してくるよ。」

あかりさんが、みんなにご飯を渡しながら言った。

「マジ！？男？女？年は？」

ゆうさんが、食いつき始めた。

『友達を作るのが、趣味だ』と前言った事を思い出した。

「まだ、会っていないけど若いみたいだよ。可愛い感じって言うってたから、女の子じゃないかな？」

あかりさんも、期待でいっぱいのようなのだ。

俺が入って始めての入居者って事もあり、みんな話題は、そいつの話だ。

ふと、時計を見るといつの間にか、7時を指していた。

「やべっ！早く行かなきゃ！」

俺は、味噌汁を流し込むと食器を急いで置いた。

俺を先頭に、次々と急いで仕事の支度を始めた。

用意された弁当を手に取り、玄関へ向かった。

「ちょっと、だいすけ君今日、ゴミ当番だよ」

みきさんの呼びかけに、またもや食堂に戻る。

「忘れてました。」

ゴミ袋を3つ持ち、また玄関に向かった。

同じ時間に、あかりさん以外全員が仕事に行く。

これも、【故郷】の毎日の日課だ。

「行って来よう」

俺は、元気な声でアパートを出た。

いつもと変わらない日。

しかし、これから始まる新しい日々の幕開けだとは、思いもしなかった。

アパートから、走って五分の所に駅はある。

今日は、少し遅く出たので、早々と改札口に向かった。

いつもならば、まっすぐにホームに行くのだが、何気なく隣に置いてあるベンチを見た。

一人の少年らしき人物がしゃがみ込んでいる。
よく見ると、何やら探してるみたいだ。

早く行かなければ、電車に間に合わないというのに、気になってしょうがなかった。

少し、考え少年の所へ向かった。

「どうしたんだ？何か探してるのか？」
優しいいっぱいで話しかけた。

少年は、俺を見て不思議そうな顔をした。

少年のそばには、大きな荷物がある。

どっからどう見ても、小学生にしか見えない。

今日は平日だけど、学校に行く素振りもない。

もしかして、家出か？

ニュースで『最近の若い奴は、すぐにキレる』って聞いた事がある。

親とケンカでもしたのだろう。

その時、（厄介な事に首を突っ込んだ）と後悔した。

少年は、何も言わずにただ俺を見ていた。

俺の質問に答える気配もないので、歩いて行こうと後ろを向いた。

しかし、何か引っ張られてる感じがする。

振り向くと、少年が泣きそうな顔で見ている。

「紙!!」

一瞬、何の事かわからなかった。

「紙？」

「そう。紙がないと、家に帰れないよ。どうしよう?」

俺は、少し考え少年の頭をなでた。

「あそこに、お巡りさんがいるから行きな。」

微笑みながら、交番を指差して去って行った。

朝から、家出少年を見るなんて…

とにかく、仕事場に向かった。

俺は、電車で15分の工場に勤務している。

小さいけれど、時給がいいからだ。

昼。

いつものように、近くの病院で勤務してる彼女と待ち合わせをして、一緒に昼食を食べていた。

彼女の名前は【みか】

年は、俺と同じ年。

付き合って、3ヶ月ぐらいだ。

「そうなんだよ。朝から、家出少年は見るし遅刻はするし、さんざんだよ」

今日見かけた少年の話で盛り上がった。

「でも、小学生ぐらいなんでしょ？危ないよ。一人でいたら」

みかは、看護師って事もあって子供好きだ。

俺も、子供は好きだけど、変な事には突っ込みたくなかった。

少し、少年の事を気がかりしながら、工場へ戻った。

休憩室に行くと、何やら騒がしい。

女性社員達の声がする。

「可愛い〜!!」

気になって、輪の中を覗いた。

「あっ！お父さん。」

俺は、悪夢を見ているようだ。

朝見た家出少年が、俺を指差している。しかも、お父さんとか叫んでる。

周りは、一瞬にして俺に注目した。

「お前、何でここに？つか、俺は、お前の父親じゃねえっつの。」

少年は、笑顔で俺の前に来た。

「だいすけ君。仕事場に子供を連れて来たら、ダメじゃないか!!」主任が、俺に話しかけてきた。

「いや…俺の子じゃないですよ。まったくの他人です」

俺の主張を聞いていないかのように、周りは、ひそひそと話した。た。

これ以上言っても、場が悪くなる。

すかさず、少年を連れて外に出た。

「お前、何でここにいるんだよ？」

俺の話を聞いていないかのように、少年はニコニコしていた。

「これ、お兄ちゃんの落とし物！！」

少年が渡すものを見ると、俺の手帳だ。

手帳には、仕事での大事なメモが書いてある。
いつの間にやら、落としていたみたいだ。

「これ、届けに来たのか？」

「うん。タクシーに乗って、住所を言ったらここに着いた。」

少年は、自慢気に話した。

「そっか。ありがとうな。でも、一人で来たら、お母さん達が心配するぞ。これで帰りな。」

俺は、五千円札を渡して仕事場に戻った。

夕方5時

今日は、いつもより早く仕事を切り上げた。

着替えをしながら、少年の事を気にした。

（まつ。帰ったのかな？）

そう言い聞かせ、工場を出た。

「お兄ちゃん」

聞き覚えがある声がして、振り向くと少年がいた。

「お前、帰ってないのか？」

「うん。待っていた。」

無邪気に笑う少年を前に、俺は考えた。

（手帳拾ってくれたし、メシでも行くか）

少年と一緒に、駅の近くのレストランに入った。

「で、お前、親はどうした？」

ハンバーグをむしゃぶりつく少年に聞いた。

「いないよ。今日から、ここに住むんだ」

なぜか、明るい少年。

「そつか。大変だな。親と離れて暮らすのは寂しくない？」
家庭の事情で、来たんだと思った。

「全然！！俺は、大人だから」

少年は、口にソースを付けたままピースした。

「名前は？」

「ガク」

「ガク君、ここ近くに住むのか？送って行くよ。」

俺は、早く帰りたい事もあり席を立った。

「いいよ。さっき、落とした紙を見つけたし、一人で行くよ。」

少年は、そう言つと財布を出した。

「いいよ。手帳拾ってくれたお礼だ。
でも、一人で大丈夫なのか？」

俺は、心配しながらも少年を見た。

「平気。こう見えても、大人だし。一人は慣れてるから」

笑顔で答えていたが、少し寂しい目をしていた。

レストランを出て、少年は軽くお辞儀をすると駅と反対方向へ歩いて行った。

その背中を見えなくなるまで、俺は見ていた。

（あんな小さい子供でも、大人に気を使っているんだな）
そう思いながら、アパートへと帰った。

アパートに着くと、みんな食堂にいた。

「おかえりー。外で食べて来たの？」

まゆさんが食事の片付けをしながら、聞いてきた。

「はい。」

返事

「いないよ。今日から、ここに住むんだ」

なぜか、明るい少年。

「そつか。大変だな。親と離れて暮らすのは寂しくない？」
家庭の事情で、来たんだと思った。

「全然！！俺は、大人だから」

少年は、口にソースを付けたままピースした。

「名前は？」

「ガク」

「ガク君、ここ近くに住むのか？送って行くよ。」

俺は、早く帰りたい事もあり席を立った。

「いいよ。さつき、落とした紙を見つけたし、一人で行くよ。」

少年は、そう言つと財布を出した。

「いいよ。手帳拾つてくれたお礼だ。
でも、一人で大丈夫なのか？」

俺は、心配しながらも少年を見た。

「平気。こう見えても、大人だし。一人は慣れてるから」

笑顔で答えていたが、少し寂しい目をしていた。

レストランを出て、少年は軽くお辞儀をすると駅と反対方向へ歩いて行った。

その背中を見えなくなるまで、俺は見ていた。

（あんな小さい子供でも、大人に気を使っているんだな）
そう思いながら、アパートへと帰った。

アパートに着くと、みんな食堂にいた。

「おかえりー。外で食べて来たの？」

まゆさんが食事の片付けをしながら、聞いてきた。

「はい。」

返事をしながら、辺りを見渡した。

「あれ？あかりさんは出かけているんですか？」

めったに、外出しないあかりさんを不思議に思った。

「今日から入居する人を迎えに行ったよ。」

まことさんが、タバコを拭かしながら言った。

俺も、一目見たくて待った。

しばらくして、玄関のチャイムが鳴った。

「ただいまあ」

どうやら、あかりさんのようだ。

全員、玄関へと向かった。

大きな荷物を床に置きながら、外にいる人に手招きをした。
一瞬。目を疑った。

「あつ！お兄ちゃん」

「はあ？家出少年ガク」

先ほどの、ガクがいた。

「知り合いなの？今日から、入居するガク君。よろしくね」
あかりさんが、ガクの肩に手を置きながら紹介した。

「ガク君かあゝ。一人なの？」

ちかちゃんが、子供に話しかけるように聞いた。

「一人だよ。」

ガクは、無邪気に答えた。

「一人って、あかりさんいいのかよ。小学生を一人で入れて」

ゆうさんは、あかりさんに言った。

「小学生じゃねえよ。俺は、17歳の高校生だ」

誰もが驚いた。

俺も、その時は耳がおかしくなったんじゃないか疑った。

「そうだよな。まっ親御さんからOKだって聞いているし。今日から、仲良くねみんな。部屋は、二階の208号室だからね」

あかりさんは、ガクに説明した。

【ガク】

年は、17歳。部屋は208号室。現役高校生。

4月の晴れた日

これが、ガクとの出会いだった。

第3話 不思議な少年

「おはようございます」

いつものように、朝食のために食堂に入った。

「おはよう」

あかりさんは、いつもながら朝から働いている。
次々と、いつものメンバーが集まった。

今日は休日。一番落ち着く朝の時間が来た。

…はずだった。

「だああああああ！！遅刻遅刻！！！」

朝から、階段を勢いよくガクが駆け下りて来た。

「だい兄。何で起こしてくれないんだよ」

「お前、自分で起きるって言ってたじゃん」

膨れ面しながら、ガクは食堂に来た。

「朝から、うるせえなあ。せつかくの休日なのに。」

まことさんは、耳を抑えながら言ってた。

「バスケの練習があるんだよ。そんな事よりも、あゝ姉味噌汁だけでいいや。」

ガクは、アパートの人達を、自分なりの呼び方にしている。

あかりさん あゝ姉

まことさん まこ兄

りなさん りな姉

ゆうさん ゆう兄

ちかちゃん ちか姉

ひろさん ひろ兄

みきさん みき姉

としさん とし兄

まゆさん まゆ姉

たかさん たか兄

俺 だい兄

初めは、違和感があったが今では慣れている。

ガクは、味噌汁を飲み込むと急いでカバンを取った。

「よし！今日も、1日頑張って行きましょう！行つてきまゝす」

「ガク、車には気を付けてよ」

あかりさんは、子供を見送るかのように手をふった。

ガクが来て、1ヶ月が経った。

徐々に、打ち解けて来て今では、いるのが当たり前のようになっている。

最年少ってこともあり、みんな何かと面倒を見ている。

毎日、ガクを中心に騒がしい日々になった。

今日は、休日でみんな出掛けた。

俺は、彼女のみかと遊ぶ約束をしている。

外出しないあかりさんも、今日だけは買い物で夕方にしか帰って来ない。

アパートでは、俺と彼女だけだ。

みかと会うのは、1ヶ月ぶりだ。

久しぶりに、思いっきりラブラブ出来る。

お昼になり、みかが作った昼食を食べて部屋で喋っていた。だんだんと、会話がとぎれお互いに見つめ合う。

2人の唇が近づいた。

「だい兄。ただいまあ。ゲームしよう!」

幸せな時間を、こいつは切り裂きやがって…

慌てて、みかと俺は離れた。

「お前、ノックぐらいしろよ。」

「あつ!邪魔?」

だって、練習も午前中で終わつたし、ヒマなんだもん」

ガクは、ずかずかと部屋に入ってきた。

「もしかして、家出少年ガク君?」

みかとガクは、初対面だ。

「そう。こう見えても、17歳」

みかにガクの事を話した。

「だい兄の彼女さん?はじめまして、いつもだい兄がお世話になってます」

珍しく、ガクが礼儀正しく挨拶した。

「だい兄。みんなは?」

「カップル組は、外でデート。たかさんは、バイクでツーリング。あかりさんは、月に一度の買い物。つか、お前何で勝手にお菓子食べていんだよ」

俺の部屋のお菓子を、つまみ食いしている。
みかと食べようと、買って来たのに…

「だってえ。ハラ減ったんだもん。」

「わかった。わかった。じゃあ、お菓子あげるから、部屋から出ていけよう！」
お菓子とガクを捕まえ、ドアに向かった。

「えゝ。せつかくの休日だよ。俺とも遊んでよ。」

「お子ちゃまは、部屋で一人でお菓子を食っとけ。」

「寂しいなあ…」

ガクは、寂しい目をして俺を見た。

「ダメ！！大人の邪魔をしるんじゃない」

ガクに言い聞かせて、ドアを閉めた。

「いいじゃん。ガク君連れて、遊びに行こうよ。」

みかの言葉を待ってましたと言わんばかりに、ガクはまた部屋に入ってきた。

「みか姉ちゃん。大好き」

ガクは、とびっきりの笑顔だ。

邪魔をされたくない俺は、何とかガクを追いつつ出そうとしたが、2対1で負けた。

しょうがなく、俺の運転でドライブする事にした。

「ガク君、どこに行こうか？」

まるで、小さな子供にでも話しかけるように、みかはガクに聞いた。

「ん」と…動物園」

「はあ？お前なあ、17歳だろ？普通の奴なら、行かないと思うんだけど」

俺は、ガクの行動に時々疑問になる。

いくら、見た目がガキに見えるたって、中身は半分大人だ。

わざとしてんのか？とか思う時もある。

「だって…行った事ないもん」

「嘘つけ！！小さい頃とかに親に連れて行ってもらっただろうが。普通の家庭なら、あるぞ」

何気に言った言葉だった。

「普通ならね…」

ガクを見ると、窓を見て寂しい目をしていた。

とっさにみかが

「いいじゃん。近くにあるしね。私も、久しぶりに思いっきり遊びたいな」

上目づかいで、俺を見た。

みかの得意技だ。

俺にお願いする時は、いつもこうする。
つつい、きいてしまう。

かなわねーよ…

車を15分走らせ、目的地の動物園に着いた。

休日ということもあり、家族連れやカップルが沢山いる。
正直、人が沢山いるのは苦手だ。

入場料を三人分払い（なぜか、俺持ち）中へと歩いた。

やはり、人だらけだ。

入った瞬間に、イヤな気持ちになる俺と反対に、ガクは騒いでいた。

「スツゲー!!!」

園内に響き渡るような、バカでかい声を上げた。

びっくりした俺は、急いでガクの口を抑えた。

「静かにしろよ」

注目を浴びたのは、言うまでもない…

ガクは、俺の手を振りほどき

「だい兄、みか姉ちゃん早く行こう」

そう行つて、走り出した。

「はぁ、先が思いやられる」

後ろでは、みかが爽やかに笑っていた。

それから、俺とガクのやりとりは繰り返された。

行く所行く所で、はしゃぐガク。

それを見て、静かにするようにな注意する俺。

後ろで、爆笑するみか。

いつの間にか、三時間過ぎていた。

園内のレストランで、何か食べようと入った。

「動物園って楽しいね。」

俺の苦勞も分らずに、レストランでも楽しく喋ってるガク。
でも、無邪気なガクを見ていて、正直楽しかった。

「ちょっと、トイレ」

トイレに立ち上がった。

その頃、ガクとみかは喋ってた。

「みか姉ちゃんとかだい兄って、長く付き合ってるの?」

ジュースを飲みながらガクは聞いた。

「一年半ぐらいかな?」

「ふん。結婚しないの?」

「どうだろうね。そんな話はしてないよ」

ガクに、ティッシュを渡しながらみかは答えた。

「だい兄の事キライなの？」

「好きに決まってるよ。だいすけは、うまく言えないけど、時々すごい力くれるの。寂しい時には、黙ってそばにいてくれるしね。だいすけ以上に、好きになる人いないよ」

みかは、少し照れながら言った。

「ラブラブだね。早く結婚すればいいのに…
みか姉ちゃんとだい兄の結婚式見たいよ」

ガクは、満面の笑顔で言った。

「だいすけの事好きなんだね」

「うん。でも、男に言うものじゃないから言わないけどさ。何か…
お兄ちゃんみたいだよ」

ガクも照れた。

「じゃあ、結婚したら私がお姉ちゃんか…結婚したら…」

みかがこの時、何を考えていたのか俺は知る由もなかった。
「こんな話、だいすけには内緒ね」

俺が戻って行くと、二人でひそひそしていた。

「何？」

「何でもない。ね、ガク君」

みかとガクは、二人で笑っていた。

「よし！だい兄、次はあっちに行こう」
ガクは、まだ動物園で遊ぶ気満々だ。

しょうがなく、また園内で遊ぶ事にした。

園内の動物の子と触れ合うコーナーで、小さな子供達と一緒に遊ぶガクを、俺とみかは見ていた。

「不思議な子だよね。ガク君ってさ。」
急に、話し出したみかを見た。

「ガク君ってさ…17歳に見えない程、子供っぽくて、それでも違和感なくてさ、ただ一緒にいるだけで楽しくなっちゃうよね。幸せな気分になるってゆうかさ…」

みかの言葉に、納得した。

ガクと出会う前は、あまり喋らなかった俺が今では、ガクと一緒に喋りまくってる。

常に、笑ってるような気がした。

「何か、ガク君は魔法使いみたいだね」
みかと一緒に、ガクを見て微笑んだ。

夕方になり、さすがに疲れ、帰る事にした。

「おいガク、あかりさん達のお土産は持ったのか？」

後部座席にいるガクを見たら、眠っていた。

「眠ってんのかよ」

「きつと、疲れたんだよ。あんなに、はしゃいでいたからね」

お土産のぬいぐるみを、手に持ちながら眠ってるガクは、愛おしい程可愛かった。

アパートに着き、ガクを降ろして、みかと俺は夜の海に来ていた。

「やっと、落ち着くな。」

砂浜に座り、みかと喋る事にした。

少し、いいムードになり俺はみかの肩に手を伸ばした。

が、みかは拒否した。

「ゴメン。だいすけにさ、話したい事があるの」

俺は、イヤな予感がした。

「何？」

「私…アメリカに行く。」

目の前がかすんだ。

「急に…何で？」

恐る恐る聞いた。

「前から、行きたいって思ってた。小さい頃からの夢で、アメリカに行って最先端の医療を勉強したいの」

みかが、看護師から医者になると言うことは知っていた。

でも、まさかアメリカに行くなんて…

ずっと、一緒にいるのが当たり前だった俺は、ショックだった…

「いつ行くのか？」

「再来週の土曜日…」

早すぎだ。

俺は、しばらく黙った。

しかし、彼女の幸せを願わなければいけない。

「そっか…頑張つて来い。」

俺の言葉を聞いて、みかは泣いた。

そっと、みかを抱きしめた。

「ゴメンね。」

みかは、何度も謝ってる。

深く心に響く…

「だいすけ、幸せになつてね」

泣きそうになりながら、しっかりとみかを抱きしめた。

みかを家に送り、俺もアパートへ帰った。

玄関を開けると、賑やかな声がした。

食堂の方へ行くと、ガクを中心にみんなで喋っていた。

「あつ！おかえりーだい兄」

今日は、ガクと絡むのがイヤだった。

「だい兄？」

ガクが、驚いた目で俺を見ていた。

みんなも驚いた顔で見てる

「だい兄。何かあったの？」

ガクの頭に、手を置くと

「何もないよ。」

優しく喋った。

ガクは、俺をまだ見ていた。

「だい兄。ウソだよ。だって、だい兄泣いてるよ」

自分でも気付かなかった。

ガクの言葉で、何かが切れたかのように、ガクにしがみつきながら

泣いた。

しばらくして、落ち着きを持った。

あかりさんが用意してくれたコーヒーを少し飲んだ。

そして、みかの事を話した。

「そっか…」

まことさんが、何も言わずに笑いかけた。

「まつ。だいすけはかっこいいしよ、また彼女ぐらい出来るって」

まことさんの言葉で、少し元気ついた。

「なんか…泣くだけ泣いたら、スッキリしましたね。よし…送別会でも開くかな？」

俺は元気に話した。

みかが、アメリカに行く前日にアパートで送別会を開く事にした。

みかを迎え、アパートのみんなと楽しく過ごした。

みかは、みんなとも打ち解けた。

「あゝ、だい兄、それ俺のだよ」

ガクの目の前にあつた唐揚げを盗んだ。

「あるものは、食べる」

そう言つて、口に入れた。

「まこ兄。だい兄が、俺の唐揚げを取つたあ」

まことさんに助けを求めるが、更に横からひろさんとゆうさんが、ガクの唐揚げを奪つた。

「俺の…唐揚げが…」

泣きそうな顔のガク。

「はいはい。まだあるんだから、ケンカしないの」

あかりさんが、また唐揚げを持ってきてくれた。
そんなやりとりをして、送別会は楽しかった。

次の日。みかの見送りに行った。

アパートのみんなも、仲良くなつたから付き添つた。

「じゃあ、元気でな」

軽くみかと握手をした。

「だいすけ…幸せにね」

一生懸命に笑顔を作ってるみかだ。

見てるだけで、辛かった。

そして、手を離し、みかは行った。

「これでいいのか？」

たかさんが、聞いてきた。

「はい。いいです。よしっ！何か食べて帰りますか？」

俺は、明るく言った。

「本当にいいの？だい兄」

ガクが、急に聞いた。

「いいんだよ。これで…」

「だいすけも、こう言っているんだし、いいんじゃない？」
としさんが、ガクに言い聞かせた。

「…ない」

何か聞こえた感じがした。

「よくねえよ!!」

急に、ガクが叫んだ。

「何で自分の気持ち伝えねえんだよ。好きだったら、言って来いよ。みか姉ちゃんは、だい兄の事好きなんだよ。だい兄以上に好きになる人いないって、俺に言ってたよ。好きな人に好きって言って、どこがカツコ悪いんだよ。好きなら、追いかけて気持ち伝えて来いよ。それでも、男なんかよ!!」
ガクの言葉に驚いた。

自分で決めたはずなのに、何か落ち着かなかった。

次の瞬間、俺は走った。

まだ間に合う。そう確信していた。

ロビーに着くと、もう何名かは飛行機に向かっていた。

「みかあゝ!!」

とっさに叫んだ。

人混みの中から、みかが驚いた様子で現れた。

「だいすけ？どうしたの？」

俺は、みかのそばに行くとき強く抱きしめた。

「俺：待ってるからよ。何年経っても、ここにいるから。俺：みかが好きだ」

みかを抱きしめる腕が強まった。

「うん。絶対に帰って来るから」

みかの肩は、わずかに震えていた。

また、みかと別れを言って歩いた。

さつきとは、違う足取りで…

アパートに着き、ガクを見るとお菓子を食べていた。

「ん？だい兄も食べる？」

さつきとは、違う顔で見るガク。

「いらねえよ。さつきは、ありがとうな」

ガクの頭を撫でると、無邪気に笑った。

この日、ガクを少し見直した。また、愛おしいとも思った。

【ガク】

まだまだ、こいつとは長く付き合いそうだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4943b/>

one's home town

2011年3月28日16時58分発行